## 資質・能力を育成する
## ～「見方・考え方」を働かせることを通して～

資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。

「見方・考え方」は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが求められる。

この、「見方・考え方」とは何なのか、「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業の実現に向けてどのようなことに配慮すればよいのだろうか。

### Ⅰ　「見方・考え方」とは何か

**（1）「見方・考え方」の定義**

学習指導要領総則において、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されている。言い換えれば、各教科等にはそれぞれ学習対象があるが、その学習対象にどのようにアプローチしてどのような視点や考え方で捉えるのかという教科等の本質に迫るための視点や考え方が、「見方・考え方」である。

従来から数学や理科などの一部の教科においては類似の概念が用いられてきたが、今回の学習指導要領では、そうした従来の整理とは別に、全ての教科について、再整理している。

**（2）「深い学び」と「見方・考え方」**

今回の改訂における審議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で、各教科等の資質・能力の育成の観点からは「深い学び」の視点は極めて重要であるとされていた。「深まり」を欠くと表面的な活動に陥ってしまうという指摘もあったからである。

また、「主体的な学び」や「対話的な学び」はその趣旨が教科共通で理解できる視点であるのに対し、「深い学び」の在り方は各教科等の特質に応じて示される必要があるとされ、各教科等の学びの「深まり」の鍵となるのが「見方・考え方」であるという見解が示された。

**（3）「見方・考え方」と資質・能力の三つの柱の関係**

学習指導要領において「見方・考え方」は、育成を目指す資質・能力の三つの柱とは別の概念として整理されている。

「見方・考え方」は「深い学び」の鍵になるものとされているが、これは「見方・考え方」を働かせることによって資質・能力が育まれるということである。すなわち、各教科等の学びを通じて子どもたちが資質・能力を獲得する過程で、子どもたちが「働かせる」ものである。

また、「見方・考え方」を働かせることで資質・能力が更に育まれたり、新たな資質・能力が育まれたりする。またそれによって「見方・考え方」が更に豊かになる。というように、「見方・考え方」と資質・能力は相互に支え合う関係にあるとされている。

**（4）「見方・考え方」と当該教科等を学ぶ意義**

今回の改訂においては、なぜそれを学ぶのか、それを通じてどのような力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にする議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理されるとともに、「見方・考え方」も教科等ごとに整理された。「見方・考え方」は、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」とされ、その教科等の本質、その教科等を学ぶ意義とも重なると言える。

さらに、「見方・考え方」は「教科等の教育と社会をつなぐ」、言い換えれば、子どもたちが大人になって生活していく際にも重要な働きをするものでもある。

### Ⅱ　「見方・考え方」を働かせて資質・能力を育成する授業を実現する上で配慮すべき事項

**（1）学習指導要領の各教科等の目標と「見方・考え方」**

まず、学習指導要領の教科等の目標に『「見方・考え方」を働かせ』ることが含まれている（※1）ことを確認する必要がある。

そして、各教科等の学習指導要領の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い　1（1）」において、「見方・考え方」を働かせる授業を実現するための学習活動の工夫について記載されている（※2）。

「子どもたちが学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる」とされ、「深い学び」の視点から授業改善をし、子どもたちの「見方・考え方」を働かせる授業に迫ることが、教師に期待されている。

**（2）授業デザインと「見方・考え方」**

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を進める際には、子どもたちが「見方・考え方」を働かせて学ぶような授業デザインを考えることが重要である。

各教科等の特質に応じて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、授業改善の在り方を検討することが求められている。

なお、各教科等の解説において示している各教科等の特質に応じた「見方・考え方」は、当該教科等における主要な「見方・考え方」を例示したもの（※3）であり、実際の授業で子どもたちが働かせる「見方・考え方」については、その例示を踏まえながら、学習内容等に応じて柔軟に考えることが重要である。

**（3）学習評価と「見方・考え方」**

観点別学習状況の評価の対象はあくまでも各教科等で育成を目指す資質・能力をどの程度身に付けているかどうかであり、「見方・考え方」を働かせているかどうか自体を評価の対象とするものではない。

しかし、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中での子どもの学びを振り返り、授業改善を行う中で、子どもたちが「見方・考え方」を働かせることができていたかを確認し、教師の更なる指導の改善等につなげることは重要である。

※1、※2、※3……資料2参照（各教科のみ作成）

【参考】

小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説　総則編

初等教育資料２０１７年１１月号

初等教育資料２０１９年９月号

---

**単元（題材）及び授業構想のポイント**

## 資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

各教科等において目指す資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることが大切です。特に、「深い学び」の鍵となるのが「見方・考え方」であり、児童生徒が「見方・考え方」を働かせて「深い学び」を実現しているかどうかについて、児童生徒を主語とした授業改善の視点をもつことが大切です。

資質・能力の三つの柱　※三つの柱のバランスのとれた育成を目指す。

学びに向かう力、人間性等

知識及び技能　／　思考力、判断力、表現力等

単元（題材）の目標　／　１単位時間のねらい

支え合う

児童生徒が…

**見方・考え方**　「深い学び」の鍵

各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方

→教師が「見方・考え方」を明確にするとともに、児童生徒が「見方・考え方」を働かせて学ぶような授業デザインを考えることが大切です。

**見方・考え方を働かせる**

習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要です。

**【授業改善の視点】**

**主体的な学び**
- ○学ぶことに興味や関心をもつ
- ○自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる

**対話的な学び**
- ○自分の考えをもった上で話し合う
- ○他者との協働や対話、先哲の考えに触れることにより、自己の考えを広げ深める

**深い学び**
- ○知識を相互に関連付けてより深く理解する
- ○情報を精査して考えを形成する
- ○問題を見いだして解決策を考える
- ○思いや考えを基に創造する

ことに向かっている

［留意事項］
- ・児童生徒の姿から三つの学びの実現状況を把握し、一体として改善・充実が図られるようにする。
- ・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。

**授業改善と評価**

- ・指導と評価の一体化を図るためには、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かすことが大切です。
- ・児童生徒が「見方・考え方」を働かせているかどうか自体は評価の対象とするものではありません。しかし、授業の中での児童生徒の学びを振り返り、授業改善を行う中で、児童生徒が「見方・考え方」を働かせることができていたかを確認し、更なる指導の改善等につなげることは重要です。

---

**理　科**　**問題を科学的に解決する活動を充実させるためのポイント**

理科では、問題解決の過程を通して育成を目指す思考力、判断力、表現力等として、問題解決の力（中学校：科学的に探究する力）が位置付けられています。その資質・能力を育成するためには、理科の見方・考え方を働かせながら、自然の事物・現象の中に問題を見いだし、見通しをもって観察、実験を行うなど、問題を科学的に解決する活動の充実を図ることが大切です。

【小学校第５学年指導事例】単元名「流れる水の働きと土地の変化」（本時５／１０時間）

ねらい：土に水を流したときの土の削られ方や運ばれる土の量を調べる実験を通して、水の速さや量が変化すると流れる水の働きも変化することを、見いだすことができる。

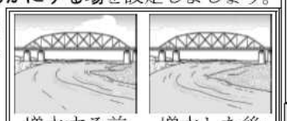
Ｔ：教師　Ｓ：理科の見方・考え方を働かせながら学んでいる児童の姿

**学習過程の例**

Point①　問題・課題
↓
Point②　予想・仮説
↓
Point③　計画立案
↓
観察、実験
↓
Point④　考　察
↓
まとめ
↓
振り返り
↓
次の問題

**Point①** 複数の事象を比較して、**差異点や共通点を明らかにする場**を設定しましょう。

Ｔ：黒板の２枚の写真は、大雨で増水する前と増水した後に水位が元に戻った川の様子を写したものです。２枚の写真を比べて、どのようなことに気付きましたか。
S1：増水した後の方が、川原が広くなっています。
S2：本当だ。増水したことが関係しているのかな。
S3：増水すると流れる水の働きはどうなるのかな。



増水する前　増水した後

**Point②** ＩＣＴ等を活用して、**既習の内容や生活経験を想起する場**を設定しましょう。

Ｔ：一学期に台風の学習で、増水した川の動画を見ましたね。その動画をもう一度確認してみましょう。
S3：増水した川はにごっているから、土や石がいつもより多く運ばれていると思う。運搬する働きが大きくなっているということかな…。
S1：増水する前と後で、川原の様子が変化するくらいだから、水の量が多くなると、流れる水の働きは大きくなると思う。

増水した川

**Point③** **変化させる要因と変化させない要因を確認したり、実験の結果を見通したりする場**を設定しましょう。

S3：水の量を変えると、流れる水の働きがどうなるのか調べよう。

Ｔ：変える条件と変えない条件はどうしますか。
S2：水の量だけ変えて、土の量や斜面の傾きは変えないで実験します。
Ｔ：予想が正しければ、結果はどうなりそうですか。
S1：水の量が多くなるほど、削られたり、運ばれたりする土の量は多くなると思います。

**Point④** **個人で考察した内容が科学的に妥当かどうかを検討する場**を設定しましょう。

Ｔ：個人で考察した内容が、みんなが納得できるものになっているかを、班で検討しましょう。
S1：「僕の班の実験では、水の量が多くなると、削られたり運ばれたりする土が多くなったから、水の量が多くなると、流れる水の働きは大きくなる」とまとめたけど、どうかな。
S2：自分の班だけでなく、他の班の結果も確認した方がいいよ。
Ｔ：複数の結果を基に考察しようとする意識がすばらしいね。
S3：水の流れの速さについても書いた方がいいんじゃないかな。
S1：そうだね。川原が広がった理由もこれで説明できるね。

**育成を目指す問題解決の力**
- ・差異点や共通点を基に、問題を見いだす力
- ・既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力
- ・予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力
- ・より妥当な考えをつくりだす力

**理科の見方・考え方**

自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。